

「言語による自己表現」が得意だと 感じている子どもは誰か？

— 家庭環境・学力・学校生活との関連を中心に —

金子 真理子 (東京学芸大学・准教授)

要約

- ◇家庭環境要因、国語学力、学校生活要因はそれぞれ、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己認知に差異をもたらしている。
- ◇母学歴は、子どもが「言語による自己表現」を得意と感じるか否かを規定する要因構造自体に違いをもたらしている。
- ◇母大卒群では、男子、「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」家庭環境、国語学力がA層であること、といった限られた変数のみが、「自分の意見が言えるほうだ」という自己認知を高める傾向がある。
- ◇母非大卒群では、これらの要因に加えて、C層以上の国語学力、学校の楽しさ、教師の期待認知、国語の授業タイプといった、様々な側面の学校生活要因が、「自分の意見が言えるほうだ」という自己認知を高める傾向がある。母非大卒群では、このような学校的要素を媒介にはじめて、言語による自己表現の可能性が開かれる子どもたちが少なからず存在しているとも言えるのではないだろうか。

1. 問題設定

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（2008年1月）では、子どもにはぐくむべきものの1つとして、「思考力・判断力・表現力」が捉えられ、この言葉は合計39回と頻出している。そこでは、「思考力・判断力・表現力等の育成」という項目が設けられ、これらの能力をはぐくむためには、以下のような学習活動が重要であると指摘されている。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明し

たり活用したりする

- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

続けて同答申では、「これらの学習活動の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である。しかし、だからといってすべてが国語科の役割というものではない」という認識が述べられた上で、次のような提言がなされている。「小学校の低・中学年の国語科において、音読や漢字の読み書き、暗唱などにより基本的な国語の力を定着させるとともに、古

典の暗唱などにより、言葉の美しさやリズムを体感させた上で、小・中・高等学校を通じ、国語科のみならず各教科等において、記録、要約、説明、論述といった言語活動を発達の段階に応じて行うことが重要である。」

「思考力・判断力・表現力」をはぐくむために例示されている①～⑥の学習活動のうち、①②⑥は特に表現活動を促進しようとするものである。特に⑥の学習活動は、「互いの考えを伝え合い」という表現にもあるように、集団の中での「言語による自己表現」が求められている。

それでは、このようなレベルでの「言語による自己表現」が得意だと感じている子どもは、そもそもいったいどのような子どもたちなのだろうか。本稿では、児童対象質問紙調査、保護者対象質問紙調査、学力調査のマッチングデータを用いることにより、複数の要因——子どもの家庭環境要因、学力要因、学校生活要因——との関連を分析したい。すなわち、自分の意見を言えるのは、どんな条件に置かれているどのような子どもなのかという問いである。

被説明変数である「言語による自己表現」が得意か否かを示す指標は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という質問に対する児童の回答を用いることにする。ただし、この質問は、子どもの「言語による自己表現」の中でも、どちらかという和学校的側面の能力を連想させるものである点は、断っておかねばならない。

まず子どもの家庭環境は、このようなレベルでの「言語による自己表現」にどのような影響を及ぼしているのだろうか。イギリスの社会学者バーンステイン（1980訳書）の初期の研究では、家族構成員の社会的アイデンティティが年齢、性別などによって決まっている家族を地位志向的家族と呼び、構成員の役割分化や権威関係が地位によって決められる

ことが比較的少なく、むしろ個人の差異を基として分化している家族を個人中心的家族と呼んでいる。そして、後者の個人中心的家族における社会化の特徴は、次のように述べられている。

地位志向的家族とは違って、言語を通じて表現され、それだけ精密化された意志とか、意味の限定付け、動機といったものが絶えず相互に調整される過程の中で、子どもの自我が発達・分化することになる。

バーンステインは、このような社会化の特徴は、どちらかといえば中産階級に多く見られると同時に、学校におけるパフォーマンスにポジティブな影響を及ぼすことを示唆している。

それでは、私たちのデータでは、家族のあり方や社会化の特徴は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という子どもの回答——このような自己表現は、現代の学校におけるパフォーマンスの一側面と認められていると同時に、家庭におけるコミュニケーションのあり方が比較的影響を及ぼしやすい領域と推測される——にどのような影響を与えているのだろうか。その一方で、国語学力や学校生活要因は、家庭環境要因を乗り越えるような影響を与えうるのだろうか。まず、このような観点から、自分の意見を言えるのはどんな条件に置かれているどのような子どもなのかを明らかにする。

ただし、このような「言語による自己表現」の得意不得意を規定する要因構造は、出身階層別に異なる構造を持っている可能性がある。本稿では、全体の分析を行った上で、次に母親の学歴階層別に同様の分析を行うことにより、児童が「言語による自己表現」に得意意識を持つような方法や道筋について、階層別の特徴もあわせて検討していきたい。

■ 2. 分析に用いる変数について

先に述べたように、被説明変数としては、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という質問への回答を用いる。説明変数としては、以下の変数を用いる。

1) 属性

性別

2) 家庭環境要因

母親の最終学歴

家族との言語を介したコミュニケーションの特徴：「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」

3) 学力

国語学力4分位：高い順にA層（正答数14-19問）、B層（正答数12-13問）、C層（正答数10-11問）、D層（正答数0-9問）

4) 学校生活要因

学校での生活：「学校生活は楽しい」「先生は私に期待をかけてくれる」

クラスの授業のタイプ（国語）：「自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業」

母親の最終学歴は保護者質問紙調査、国語学力は学力調査、その他の変数はすべて児童対象質問紙調査の結果から用いている。以上の被説明変数と説明変数の分布は、表5-1と表5-2に示す通りである。

表5-1 データに用いる変数の分布

(%)

被説明変数	説明変数					合計
	よくあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答・不明	
みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ	20.3	36.5	35.0	7.7	0.5	100.0 (2,509)
属性：	説明変数					合計
	男子	女子				
性別	50.6	49.4				100.0 (2,509)
家族との言語を介したコミュニケーションの特徴： 親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	無回答・不明	合計
	32.5	34.0	23.6	9.0	0.9	100.0 (2,509)
学力： 国語学力4分位	A層	B層	C層	D層	合計	
	21.3	25.2	23.2	30.3	100.0 (2,502)	
学校での生活： 学校生活は楽しい	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	無回答・不明	合計
	40.6	46.9	9.4	2.7	0.4	100.0 (2,509)
先生は私に期待をかけてくれる	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない	無回答・不明	合計
	14.7	37.9	32.9	13.4	1.0	100.0 (2,509)
クラスの授業のタイプ（国語）： 自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う 授業	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない	無回答・不明	合計
	56.9	35.5	6.2	0.8	0.7	100.0 (2,509)

注1) 数値は、割合(%)。注2) ()内の数値は、分析に使用したケース数。

表5-2 母親の最終学歴の分布

(%)

母親の最終学歴	
小学校・中学校	1.9
高等学校	41.5
専門学校・各種学校	16.5
短期大学・高等専門学校	23.5
大学	12.5
大学院	0.4
その他	0.1
無回答・不明	3.6
合計	100.0 (2,533)

注1) 数値は、割合(%)。注2) ()内の数値は、分析に使用したケース数。

被説明変数である「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という質問に対する回答の分布は、「よくあてはまる」20.3%、「まああてはまる」36.5%、「あまりあてはまらない」35.0%、「まったくあてはまらない」7.7%、「無回答・不明」0.5%であり、「よくあてはまる」と「まああてはまる」の合計は56.8%である。

■ 3. 「言語による自己表現」の規定要因

表5-3は、属性別、家庭環境別、学力別、学校生活別に、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」に「あてはまる」（「よくあてはまる」＋「まああてはまる」の合計%）と答えた割合を1つの表にまとめたものである。まず、属性要因をみると、「自分の意見が言えるほうだ」と答える割合は女子は50.4%なのに対し、男子は63.5%と10ポイント以上多い。

次に、家庭環境要因をみると、母学歴¹は有意な影響を与えていない。母親が大卒であろうとなかろうと、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己評価する割合は6割弱で変わらないのである。一方、家族との言語を介したコミュニケーションの特徴について聞いた質問項目「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」は強い影響を与えている。「ある」（「よくある」＋「ときどきある」）と答えた児童では62.3%が「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己評価しているのに対し、「ない」（「あまりない」＋「まったくない」）と答えた児童では46.0%にとどまる。

それでは、子どもの学力や子どもにとっての学校生活要因は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己評価にどのような影響を与えているのだろうか。

か。国語の学力調査結果との関連をみると、最も通過率の高いA層では61.2%、B層で59.7%、C層で57.4%、最も通過率の低いD層で51.1%となっている。学力が高いほどこのような「言語による自己表現」を得意とする傾向が概ね表れているが、数値的にはC層とD層の間の差が大きいがわかる。

次に、学校での生活について児童に尋ねた質問項目との関連を見ると、「学校生活は楽しい」「先生は私に期待をかけてくれる」は強い影響を与えている。「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の合計%）と答えた子どものほうが、「そう思わない」（「あまりそう思わない」＋「まったくそう思わない」の合計%）と答えた子どもに較べて、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己評価する割合はそれぞれ20.6ポイント、16.2ポイントずつ高まるのである。

最後に、国語の授業タイプとの関連について確認しておこう。「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己評価する割合は、国語の授業で「自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業」が「よくある」と認知している子どもでは62.8%、「ときどきある＋あまりない＋ほとんどない」と認知している子どもでは49.2%であった。あくまでも子どもの認知を通した授業経験ではあるが、そのような授業を多く経験している子どものほうが、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己を認知する傾向が高まる可能性が示唆される。

■ 4. 母学歴による差異

以上の家庭環境要因、国語学力、学校生活要因は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己認知にそれぞれ差異をもたらしていたが、唯一、母学歴だけは有意な差をもたらしていなかった。「み

1 以下のすべての表において、母学歴が大卒とは、母親の最終学歴が「大学」「大学院」という回答、非大卒とは「小学校・中学校」「高等学校」「専門学校・各種学校」「短期大学・高等専門学校」という回答による。「その他」と答えた者と「無回答・不明」については分析から除外してある。

表5-3 「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と答えた割合
(属性別、家庭環境別、学力別、学校生活別)

					有意確率	
性別	男子 (1,262) 63.5%	女子 (1,234) 50.4%		合計 (2,496) 57.1%	*** 0.000	
母学歴	大卒 (321) 58.3%	非大卒 (2,082) 56.5%		合計 (2,403) 56.8%	0.562	
親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる	ある (よく+ときどき) (1,661) 62.3%	ない (あまり+まったく) (817) 46.0%		合計 (2,478) 56.9%	*** 0.000	
国語学力4分位	A層 (529) 61.2%	B層 (626) 59.7%	C層 (577) 57.4%	D層 (752) 51.1%	合計 (2,484) 56.9%	*** 0.001
学校生活は楽しい	そう思う (とても+まあ) (2,189) 59.5%	そう思わない (あまり+まったく) (303) 38.9%		合計 (2,492) 57.0%	*** 0.000	
先生は私に期待をかけてくれる	そう思う (とても+まあ) (1,318) 64.7%	そう思わない (あまり+まったく) (1,159) 48.5%		合計 (2,477) 57.1%	*** 0.000	
自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業(国語の授業タイプ)	よくある (1,423) 62.8%	ときどきある+あまりない+ほとんどない (1,062) 49.2%		合計 (2,485) 57.0%	*** 0.000	

注1) %数値は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」に「あてはまる」「よくあてはまる」+「まああてはまる」の合計)と答えた割合。

注2) ()内の数値は人数。

注3) *はカイニ乗検定の結果。*** 1%水準で有意、** 3%水準で有意、* 5%水準で有意。

注4) 無回答・不明は除いて計算してある。母学歴については、「その他」を選択した者も除いて計算した。

んなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と答えた割合は、母学歴によらず変わらなかったのである。しかしながら、母学歴は、子どもが「言語による自己表現」を得意と感じるか否かを規定する要因構造自体には違いをもたらしているのではないだろうか。以下では、母親の学歴階層別に前節と同様の分析を行うことにより、児童が「言語による自己表現」に得意意識を持つようになる規定要因について、階層別の特徴を検討していきたい。

表5-4は、表5-3のクロス分析を、母学歴で統制した結果である。母学歴で統制した場合でも、先の単純クロス集計にみられた傾向はおおむね残っている。ただし、学校生活要因に関しては、母大卒群では有意な差が消えてしまう。つまり、母親が大卒の子どもにとっては、学校生活要因は、学校的な「言語による自己表現」に対する得意不得意を左

右するような要因には必ずしもなっていないということである。

反対に母非大卒群では、「学校生活が楽しい」「先生は私に期待をかけてくれる」と思っているほど、国語の授業では「自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業」が多いと認知しているほど、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己を評価する割合が高い。数値を母大卒群と比較すると、母非大卒群の子どもたちは、学校生活が楽しくなかったり、先生の期待を認知していなかったり、以上のような国語の授業を経験していなかったりした場合、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己を評価する割合が低位にとどまる傾向があるためである。すなわち、母学歴が非大卒の子どもたちにとっては、学校生活要因が、学校的な「言語による自己表現」の得意不得意を左右する大きな要因になっていると推測される。

表5-4 「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と答えた割合（母学歴による統制）

					有意確率	
性別	男子 (150) (1,061)		女子 (171) (1,021)	合計 (321) (2,082)		
大卒	67.3%		50.3%	58.3%	*** 0.002	
非大卒	62.5%		50.3%	56.5%	*** 0.000	
親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる	ある (よく+ときどき) (230) (1,368)		ない (あまり+まったく) (89) (698)	合計 (319) (2,066)		
大卒	63.5%		43.8%	58.0%	*** 0.001	
非大卒	61.8%		46.0%	56.4%	*** 0.000	
国語学力4分位	A層 (130) (389)	B層 (97) (506)	C層 (48) (503)	D層 (45) (674)	合計 (320) (2,072)	
大卒	63.1%	62.9%	41.7%	51.1%	58.1%	* 0.037
非大卒	60.7%	58.7%	57.9%	51.0%	56.4%	*** 0.006
学校生活は楽しい	そう思う (とても+まあ) (283) (1,823)		そう思わない (あまり+まったく) (38) (256)	合計 (321) (2,079)		
大卒	59.0%		52.6%	58.3%	0.454	
非大卒	59.2%		37.5%	56.5%	*** 0.000	
先生は私に期待をかけてくれる	そう思う (とても+まあ) (158) (1,111)		そう思わない (あまり+まったく) (159) (957)	合計 (317) (2,068)		
大卒	63.3%		53.5%	58.4%	0.076	
非大卒	64.6%		47.3%	56.6%	*** 0.000	
自分たちの考えを发表或し、意見を言い合う授業（国語の授業タイプ）	よくある (177) (1,197)		ときどきある+あまりない+ほとんどない (143) (876)	合計 (320) (2,073)		
大卒	57.6%		58.7%	58.1%	0.841	
非大卒	63.2%		47.3%	56.5%	*** 0.000	

注1) %数値は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」に「あてはまる」（「よくあてはまる」＋「まああてはまる」の合計）と答えた割合。

注2) ()内は、左の数値が、各質問項目に母大卒でそう答えた合計人数、右の数値が母非大卒でそう答えた合計人数。

注3) *はカイ二乗検定の結果。*** 1%水準で有意、** 3%水準で有意、* 5%水準で有意。

注4) 無回答・不明は除いて計算してある。

5. 「言語による自己表現」の規定要因構造

以上のクロス分析の結果は、変数間の相互の影響を除いた上でも成り立つのだろうか。そこで、どのような子どもが「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」と自己評価している（「よくあてはまる」＋「まああてはまる」＝1）のか否（「あまりあてはまらない」＋「まったくあてはまらない」＝0）かを従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った。結果は、表5-5の通りである。この手法を用いることで、それぞれの要因が、従属変数となる回答に与えた純粋な効果をみることが出来る。つまり、「学校生活は楽しい」という要因をみれば、「性別」や「国語学力」といった他のすべての要因の影響を取り除いた上で、「学校生活

は楽しい」だけが回答へ与えた効果をみることが出来るのである。

有意水準5%以内の項目をみると、属性面では男子、家庭環境面では「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」、学校生活面では「学校生活は楽しい」「先生は私に期待をかけてくれる」「自分たちの考えを发表或し、意見を言い合う授業」が、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己認知を高めていることがわかる。国語学力については、D層を基準とした場合、B層以上の学力を持っていることが、言語による自己表現への自信を高めているといえよう。これに対し、ここでもやはり母学歴は有意ではない。

次に、以上のロジスティック回帰分析を母学歴階層別に行ったところ、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」とい

う自己評価を規定する要因構造が、階層別に異なっているという結果が出た。

まず、表5-6は母大卒群の結果である。有意水準5%以内の項目をみると、男子、「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」、国語学力がA層であること、という3つの変数は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己評価を高めるが、その他の主に学校生活に関する変数——B層以下の国語学力、学校生活は楽しいと思っいること、先生の期待認知、国語の授業タイプ——は、いずれも有意ではない。

次に、表5-7は母非大卒群の結果である。すべての変数が「みんなの前ではっきりと自

分の意見が言えるほうだ」という自己評価に有意な影響力を持っている。すなわち、男子であるほど、「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」ほど、国語の学力が高ければ高いほど、学校生活は楽しいと思っいるほど、先生の期待を認知しているほど、「自分たちの考えを公表したり、意見を言い合う授業」がよくあると認知しているほど、「言語による自己表現」に対する自信が高まる構造にある。母非大卒群の場合、母大卒群と異なっている点は、国語学力とその他の学校生活要因が、「みんなの前ではっきりと自分の意見を言えるほう」か否かを独自に規定する強い誘因になっているという点である。

表5-5 「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほう」か否かを規定する要因
(二項ロジスティック分析：全体)

	B	有意確率	Exp(B)
性別ダミー (男子=1)	.707	.000	2.029
母大卒ダミー (大卒=1)	.000	.997	1.000
親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる (よく+ときどきある=1)	.578	.000	1.783
国語学力ダミー (D層ベース)			
国語学力 (A層ダミー)	.434	.001	1.543
国語学力 (B層ダミー)	.390	.001	1.477
国語学力 (C層ダミー)	.229	.059	1.257
学校生活は楽しい(とても+まあそう思う=1)	.645	.000	1.907
先生は私に期待をかけてくれる (とても+まあそう思う=1)	.492	.000	1.635
国語：自分たちの考えを公表したり、意見を言い合う授業 (よくある=1)	.479	.000	1.614
定数	-1.805	.000	.164

注) 分析に使用したケースN=2,347。Cox & Snell R²乗値=.091。

表5-6 「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほう」か否かを規定する要因
(二項ロジスティック分析：母大卒群)

	B	有意確率	Exp(B)
性別ダミー (男子=1)	.801	.001	2.228
親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる (よく+ときどきある=1)	.757	.006	2.133
国語学力ダミー (D層ベース)			
国語学力 (A層ダミー)	.757	.042	2.133
国語学力 (B層ダミー)	.751	.054	2.119
国語学力 (C層ダミー)	-.209	.637	.811
学校生活は楽しい(とても+まあそう思う=1)	.094	.805	1.098
先生は私に期待をかけてくれる (とても+まあそう思う=1)	.227	.376	1.255
国語：自分たちの考えを公表したり、意見を言い合う授業 (よくある=1)	-.060	.806	.942
定数	-1.236	.020	.291

注) 分析に使用したケースN=313。Cox & Snell R²乗値=.089。

表5-7 「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほう」か否かを規定する要因
(二項ロジスティック分析：母非大卒群)

	B	有意確率	Exp(B)
性別ダミー (男子=1)	.707	.000	2.028
親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる (よく+ときどきある=1)	.548	.000	1.730
国語学力ダミー (D層ベース)			
国語学力 (A層ダミー)	.354	.011	1.425
国語学力 (B層ダミー)	.338	.008	1.402
国語学力 (C層ダミー)	.270	.033	1.311
学校生活は楽しい(とても+まあそう思う=1)	.745	.000	2.106
先生は私に期待をかけてくれる (とても+まあそう思う=1)	.538	.000	1.712
国語：自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業 (よくある=1)	.570	.000	1.768
定数	-1.931	.000	.145

注) 分析に使用したケースN=2,034。Cox & Snell R²乗値=.100。

6. 結論

以上の結果をまとめると次のようになる。家庭環境要因、国語学力、学校生活要因は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という自己認知にそれぞれ差異をもたらしていた。ただし、唯一、母学歴は、「みんなの前ではっきりと自分の意見が言えるほうだ」という子どもの自己認知に対して必ずしも直接的な影響力を持っていなかった。しかしながら、母学歴によって、子どもが「言語による自己表現」を得意と感じるか否かを規定する要因構造自体が異なっていることがわかった。

ロジスティック回帰分析の結果をみると、母大卒群では、男子、「親に自分の考えをじっくり聞いてもらえる」家庭環境、国語学力がA層であること、といった限られた変数の

みが、「自分の意見が言えるほうだ」という自己認知を高めていることがわかった(表5-6)。

一方、母非大卒群では、これらの要因に加えて、C層以上の国語学力、学校の楽しさ、教師の期待認知、国語の授業タイプといった、様々な側面の学校生活要因が、「自分の意見を言える」か否かを左右していた(表5-7)。つまり、母非大卒群では、学校での生活や学校的学習が、学校的な「言語による自己表現」の可能性を高めるという点が特徴的な結果である。逆に言えば、母非大卒群では、このような学校の働きかけを媒介にはじめて、このようなレベルでの「言語による自己表現」の可能性が開かれる子どもたちが少なからず存在しているとも言えるのではないだろうか。

●参考文献

バジール・バーンステイン 1980 「社会階級・言語・社会化」J. カラベル/A. H. ハルゼー編 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動 下』東京大学出版会(原典: Basil Bernstein, "Social Class, Language and Socialization," Current Trends in Linguistics, Volume 12, ed. A. S. Abramson et al. Mouton, 1973)